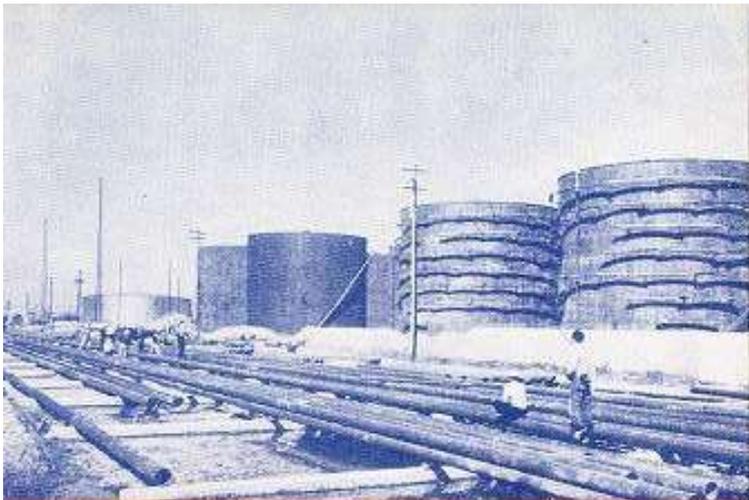
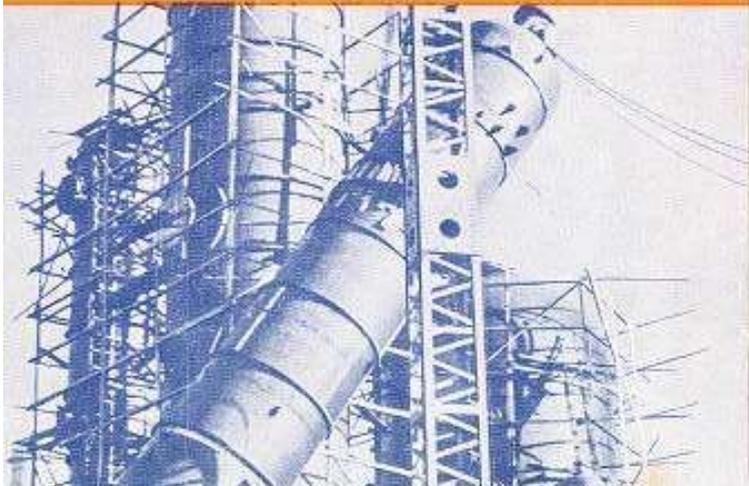


昭和33年 昭和四日市石油竣工記念 建設譜 (リーフレット)



四日市製油所竣工記念



力と経済のハイパワーガソリン 昭和石油

四日市製油所竣工操業

待望の昭和四日市石油四日市製油所は、いよいよ竣工の上操業開始の運びとなりました。

我が国のほぼ中央、三重県四日市港の一角に、広ぼう30万坪に及ぶ旧海軍第2燃料廠跡に建設中の新製油所は、昭和31年5月以来、昭和石油株式会社(昭和32年11月1日より当社が引継)が、シエールグループの資本及び技術援助を受け、工費約168億円を投じて建設致して参ったもので、この程長く大平の工事を務り来る昭和33年5月26日、めでたく記念すべき竣工式を挙げる事になったのであります。

新製油所は、主としてイラン及びクウェート原油を輸入して、高オクタン価ガソリン、シエール燃料、高級ターセル油等の高級燃料油を精製致しますが、特にこの製油所では、シエール式接触流動分解装置により、灯油軽油等から高オクタン価ガソリンを製造すると同時に、ガス分離装置と相俟ち、石油ガスを生産し、これを目下隣接して建設中の三菱油化株式会社の石油化学工場に、原料として供給致しますから、本製油所は燃料並びに石油化学工業という、石油工業の食分野に亘って重要な働きを致します。

新設の製油所構内には、40,000バレルの日産を誇る大原油蒸留装置を中心に、日産23,500バレルの軽圧蒸留装置、日産12,000バレルの接触流動分解装置、ガス分離装置、各種沈澱装置等の数々の新設施設が林立し、その外150屯/時の能力を持つ汽鍋設備、10,000kwの自家発電施設、高水では168,000屯/日、工業用水では25,000屯/日を消化する給排水施設、その他大規模高効率な附属設備を有し、さらにタンク部は20,000リットル原油タンク6基合計120,000リットルを初め、総数110基全容量375,015リットルに上る各種タンクと、300軒に達するパイプラインを有しています。一方港湾施設は、45,000屯級並びに32,000屯級スーパータンカーが同時接岸可能な全長220米の大専用棧橋と、5,000屯級タンカー2隻、1,000屯級タンカー1隻が同時荷役も可能な岸壁を新設致しましたから、勿論この種の施設としては、本邦最大のものであります。

既に生産体勢整った新製油所では、去る3月上旬原油第1船ハーブタ号(シエール所属)を迎え、同乗船々原料油も入荷し、各種装置の試運転も上々の成績を収めるに至りましたから、竣工後の操業は、優秀な製品を提供して、必ずや傍級の御期待に添うことが出来ると存じます。

当昭和四日市石油株式会社は、専ら精製を業とし、直接販売は致しませんので、当社の製品は、すべて提携の昭和石油及びシエール石油の手で販売されることになっております。どうか全国津々浦々の昭和及びシエールの販売網を通じて、本製油所製品の優秀性を、心ゆくまで御賞味下さいませ。

昭和石油 提携 昭和四日市石油株式会社
シエール石油 本社 東京都千代田区九ノ丁2の3(東8ビル)
新橋事務所 東京都港区芝新橋1の18(東ビル)
四日市製油所 四日市市東福浜町1

SHELL の ICA は特許のガソリンです シエール石油

昭和33年 昭和四日市石油竣工記念 建設譜 (リーフレット)

建設譜 第一部

(昭和四日市石油製油所)

企画 シェル石油株式会社
昭和石油株式会社
製作 日映科学映画製作所

監督	小林正忠
構成編集	下坂利春
撮影	佐藤登士 川村浩 後藤淳務 野見山
照明	城戸博士 鈴木忠一
録音	金谷常三郎
音楽	団伊玖磨

四日市公開

昭和33年 5月26日(月)・27日(火)

四日市市町弥生館

東京公開

昭和33年 5月30日(金)・31日(土)

東京都銀座七丁目 銀座ガスホール

解 説

この映画は、昭和四日市石油株式会社、三菱興四日市市田海第2製油廠竣工に、目下建設中の同社四日市製油所の工事状況を、工を述べて、写真に採いた記録映画である。

映画は、昭和33年5月、政府がこの地域を昭和石油株式会社に買下げ、同社とシェル・グループ及び三菱グループの協力の下に、最新製油所を中心とした石油工業の一大綜合基地を建設することに決定した時から撮影を開始して、製油所の建設工事が、昭和石油の手により、シェル・グループの技術援助に行われつつ、進展した田海製油所、次々と進められて行く様を描き、揚揚目を躍らさばかりの完成が、一日一日近代的な製油施設に変貌する過程を、正確かつ興味深く描写している。そして、今回公開される第1部全4巻には、一部工事を残した主要施設が、概ね竣工して、いよいよ試運転に入るとする昭和33年5月11日、はるばる中東から海を越えて入港した原油第1船「アブダビ」号(シェル社)が、新築された専用火油機に燃焼する歴史的瞬間に留まるまでの、約2ヶ月に亘る記録を収めているのである。

建設工事の記録映画としては、今日『佐久間ダム』や『貝見川』など数多い佳作が生まれ、記録映画のうちには特に注目すべきジャンルを形作っているが、これ等の映画は、おしなべて人類の自然に対する斗争、即ち近代科学を武器とした人類が、如何にして自然の脅威に挑戦し、これを克服するかは主題を置いたものが多いようである。しかし、この映画は同じ建設記録映画の範疇に属するものではないが、その主題とするのは自然に対する挑戦ではなく、寧ろ、それは人類の努力が、人類自らの起した戦争の惨禍への挑戦として現われているのである。戦災を蒙りて荒蕪その極に達して幾年月、夏草の成るにまかせた楽土が、再び時代の脚光を浴びて、近代科学の奇を呈した新式工場に裏切られて行く光景を描いて、戦後の毒草から立ち上る再建日本の姿、不死鳥の如き人類の強靭な建設意欲が、強烈なイメージで描き出されているのである。この意味では建設記録映画のうちでも、極めて特異なものといふことが出来ると思う。

映画は建設工事を完遂する、現代日本工業力の水準の高さを強調して描写しているが、同時に建設されて行く様々の短歌を通じて、石油の精製過程を、説明平易に説き示して、石油産業に対する、社会的使命も十二分に表している。しかもこのような場所的に局限された題材で、随々もすれば無味乾燥に陥り易い内容を輝くものに昇らす、場面転換や多変態の盛り込み等には繊細な神経を使つて、平版を起した編集に成功している。殊に映画を動員する労働者中心に展開すると共に、その間市井の行事や生活を巧みに反映して、豊かに人間の感情味で書くことに努力していることは、高く評価されるべきものと思う。画面構成の美しさと相俟って、賑やかな雰囲気から感ぜられる内容は、P・R映画の枠を外しても、充分觀賞に値する。製作者の日映科学映画製作所(代表取締役 石中純吉氏)は、文化映画の製作者としては、わが国では代表的な地位を占め、『特撮の生態』、『谷間の学校』、『小さな宇宙』、『雑草』、『貝見川』等、数多くの傑作を生み、その受賞作品も甚多いが、特に最近ではP・R作品に優秀なものが多い。監督の小林正忠氏は、前記作品の大部分を始め、『みちのくにをゆく』、『日立のこゝろ』等、P・R作品にも卓越した手腕を示している。